



# 引き継がれる伝統

明治時代に考案されたと伝えられている、市指定無形民俗文化財・南田島の足踊り。踊り手が仰向けになり、足に着物をまとい、足先におかめ・ひよっこなどの面を付け、雛子に合わせて人形を操り踊ります。南田島雛子連足踊り保存会の皆さんは、毎週土曜日、これらの伝統を継承するため、地域の子供たちと共に、練習しています。



齋藤くん熱心に指導する森田さん

踊り手は、お客さんと同じ方向から人形を見ています。そのため、人形を右側に動かすときは、左側に動かさなければなりません。

現在、南田島氷川神社で、十三人のちびっ子雛子連と、同保存会の皆さんと一緒に足踊りを守り続けています。4月や7月の祭りで足踊りを披露したり、10月の川越まつりに参加したりしています。雛子に合わせユーモラスに、踊る姿は、お客さんからは、まるで「お面をかぶった人」が踊っているかのように見えません。



雛子の練習も真剣そのもの

「両手を袖の下に入れて、傘を動かしたり、顔を袖で隠したりする動作など、手を使う場面もあります。両手・両足を使って、踊りの流れを自然に見せるところが難しいですね」と踊りを指導する森田司郎さん（70歳・下新河岸）。ちびっ子雛子連で足踊りを担当するのは、齋藤鷹矢くん（小学5年生）と榎田理央くん（小学6年生）の2人は、「授業で体験し、面白いなと思ったから」と始めたきっかけを話してくれました。「実際に練習を始めると、足を上げ下げする時に、痛かったり、頭に血が上ったりと大変です」。その一方で、「やっている間は、お客さんの顔は見えないけれど、笑い声や

拍手などで、反応が分かるところが楽しい」とも話してくれました。人前で踊れるようになるには早くて二年、一人前になるには五、六年の練習が必要といわれています。「この子供たちが大人になっても足踊りを続け、その次の世代へと、ずっと伝承してもらいたい。南田島の子供たちの参加が増えてほしいですね」と同保存会会長の細野稔さん（64歳・南田島）は、語っていました。



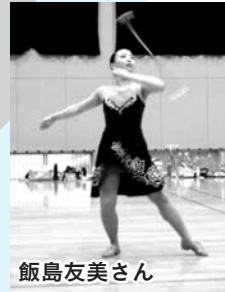
足を使って、1人2役

## いざ、世界の舞台へ！



本番で着る衣装をまとい、ポーズを決める3人

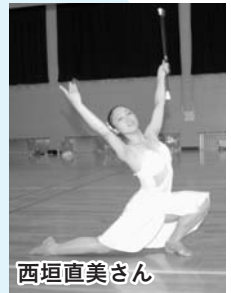
今夏、オーストラリアのシドニーで開催される、世界バトントワリングの大会。西垣知枝さん(19歳)、西垣直美さん(18歳・小仙波町4丁目)姉妹、飯島友美さん(23歳・新富町1丁目)の3人が日本代表として出場します。競技は1本のバトンを使用して技術を競うソロトワールや、バトンテクニックと身体表現の演技を競うフリースタイルなど。「世界大会では、自分らしい演技をしたい」「自信を持って臨み、1位を目指します」と口をそろえて抱負を語ってくれました。この広報が届くころには、大会の結果が出ています。3人の活躍が楽しみです。



飯島友美さん



西垣知枝さん



西垣直美さん

## ロナウ二郎がグルメ大使に！

市は、NHK朝の連続テレビ小説「つばさ」に出演中の俳優・脇知弘さんを、「小江戸川越観光グルメ大使」に任命しました。

脇さんは「つばさ」で、ラジオぼてとの一員「ロナウ二郎」役としてグルメレポートを担当しています。また、6月からNHKさいたま放送局のホームページにブログ「ロナウ二郎の川越・埼玉いただきます」を掲載中。川越の食文化を紹介しています。

好きな食べ物は？ の質問に「もちろん名物の太麺やきそばです。ラムネとの相性がバツグンですね。これから川越ならではの食文化を全国に紹介していきます。川越がもっと活気づいてくれたら」と、笑顔いっぱいでお答えしてくれました。



委嘱書を手に「おいしい食べ物を紹介します」と脇さん



「将来は科学者になって、みんながびっくりするような実験を見せてあげたい」と夢を話してくれました。

「絵を描くのが大好きです」。霞ヶ関北小学校5年生の城戸崎くんが、「下水道の日・下水道いろいろコンクール」で、特選の国土交通大臣賞に選ばれました。昨年度実施されたこのコンクールには、全国から六千五百二十一点の応募がありました。応募のきっかけは、4年生の社会科の授業で、下水道の仕組みを学び、興味を持ったから。夏休みに、一週間掛けて描き上げました。「汚れたしずくがだんだん元気になっていくところや、魚やホタルなどの生物が、きれいになった水の中で、気持ちよさそうに暮らしているところが気に入っています」と城戸崎くん。

